

日韓原生生物学会合同大会 Kobe2020（日本原生生物学会第53回大会）開催報告

Kobe2020 大会長 洲崎敏伸

今回の大会は、2020年11月22日～23日に、神戸大学を拠点としてオンラインで実施されました。

Expect the best, plan for the worst, and prepare to be surprised.

（最高のものを期待し、最悪の事態に備えて計画を立て、驚くことに備えましょう）
これは、アメリカの Denis Waitley という人の語った言葉です。私は今回の日韓原生生物学会合同大会 Kobe2020 のモットーとしてこの言葉を選び、ポスター発表の会場となった SpatialChat の入り口の画面に掲げました（図1）。今回の大会は、日本と韓国の学会が一体化して実施した初めての大会です。私たち準備委員会の日本側メンバーは、韓国側との意見交換を何回も重ね、参加者の皆さんにより大会だったと思っていただけるよう

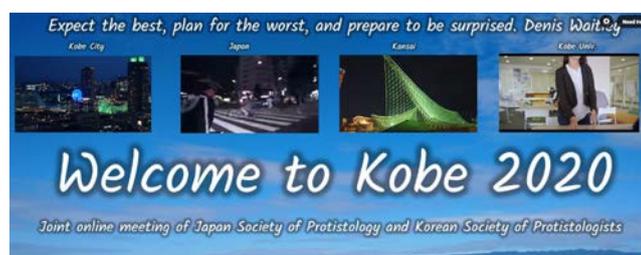


図1. ポスター会場（SpatialChat）の入り口の画面

に準備を進めてきました。オンラインでの学会は、準備する側にとっても参加する方々にとっても、まだまだ慣れていないことばかりです。オンラインの深い森の中でみなさんが迷子にならないように、できるだけ準備はしたつもりでしたが、ポスター会場の案内などは説明不足だった点も多くあり、これは今後への反省材料として生かしていかなければなりません。

さて、参加された皆さんは、「驚くことに備えましょう」という点に関してはいかがだったでしょうか？皆さんは、様々な感想を持たれたことと思います。オンラインのいいところと悪いところはいまさら言うまでもありません。しかし、いい意味でも悪い意味でも、いろいろと驚かされたことが多かった学会だったのではないのでしょうか。私たち準備委員会は、長い時間をかけ、できる限りの準備をしてきたつもりでした。ですので、今さら驚くことはないのでは、と実は思っていたのですが、そんな予想に反して、フタを開けてみるとまさに驚きの連続でした。

表1. Kobe2020の参加者

Membership	
JSP (regular)	46
JSP (student/postdoc)	13
JSP (associate)	1
JSP (highschool student)	1
Non-member (Japan)	18
Subtotal	79
KSOP (regular)	20
KSOP (student/postdoc)	28
Non-member (Korea)	6
Subtotal	54
Other countries	18
Total	151

第一に、参加者が予想以上に多く、また多くの国からの参加者があったことは、何より嬉しい驚きでした（表1、図2）。日韓以外の国からも、中国・バングラデシュ・ウクライナ・イギリス・アメリカなどから18名もの参加者がありました。また、学生の参加者が多かったことも嬉しいことでした。現地開催となるとどうしても旅費や参加費が必要となりますが、今回のオンライン開催は参加費無料で自宅からでも参加できます。大学1年生や高校生の研究発表もあり、若い力の台頭を強く感じた大会でした。

Kobe2020は、日本原生生物学会会長の春本晃江博士によるOpening Remarksで始まりました。ここでは、日韓がこれまでに2回開催してきた共同シンポジウムの歴史が紹介されました。

基調講演（2件）とシンポジウム、そして一般発表の一部（11件）はZoomを使った口頭発表として実施されました。一部で音声乱了れたり、画面共有にてこずったりする場面もありましたが、いずれも大きな問題とはならず、最終的にはすべての発表がともスムーズに行われました。中でも圧巻だったのは、

発表の二日前に足を骨折して闘病中の保科亮博士が、病室のベッドの上からスマホのテザリングを使ってすばらしい講演をされたことだったと思います。ネットが繋がっていればどこからでも気軽に参加し、発表できるというのは、オンラインのすばらしい利点の一つです。まさかこのような発表が私たちの学会で可能となるとは予想もしていなかったもので、私はとてもびっくりしました。これもすばらしい驚きだったと思います。

シンポジウムは、“diversity”をキーワードに行われました。原生生物の“diversity”と、それを研究する研究者の“diversity”を幅広く6人の方々にお話ししていただきました。中でも私は、視覚障害を持ちながらも優秀な研究を学生さんたちと共に進めている島袋勝弥博士の講演に感銘を受け、生きていく勇気を分けていただいたような気がしました。講演後の質疑応答の時間に、韓国のJong Soo Park博士が「私はこのお話を、私の学生や、これから会うすべての人たちに、できる限り話して広めていきたい」と語っていたのも印象的でした。私たちはその大きさや種類は様々ですが、みんな何かの障害や生きづらさを抱えて生きています。COVID-19や足を骨折したりするのもそんなトラブルの一つでしょう。しかし、そんな問題を一人で抱え込まず、みんなで共有することで、生きる力が生まれてくのだと感じたシンポジウムでした。

ポスター発表（28件）は、SpatialChatとLINC Bizを使って行われました。LINC Bizのサイトは大会の一週間前から公開され、そこに掲示された発表者のポスターを自由に閲覧し、テキストチャットに質問を書き込むことで、長期間にわたって活発な議論が繰り広げられました。大会の当日には、SpatialChatを用いて口頭での説明と質疑応答が行われました。SpatialChatは、参加者の人数と使用時間を掛けた数値に対して課金されます。ポスター会



図2. 参加者の集合写真

場には思いのほか多くの参加者が長時間にわたって滞在し、活発な議論がなされたようです。その結果、課金が予算を大きく上回ってしまいました。これは、会計的にはあまり嬉しくない驚きでしたが、大会としてはとても喜ばしいことでした。ちなみに、今回の大会で使用した経費は主にネットワーク関係の使用料（Zoom, SpatialChat, LINC Biz の契約料）などとして約 30 万円となりました。これは、本来計画していた神戸での大会開催に見積もっていた経費の約 15 分の 1 であり、オンライン開催は経済的にも大きな利点があることもわかりました。さらに、今回の大会は日韓の合同開催ということで、国際原生生物学会 (ISOP) からオンライン開催費の補助として約 2,000 ドルをいただきました。深く感謝いたします。

今回の大会では、64 名の学生あるいはポスドクの方が参加されました。これは、全参加者数の 42% になります。この中の 15 名が優秀発表賞 (BPA: Best Presentation Award) に応募され、事前の書面審査で 6 名が口頭発表を行い、このセッションに参加した全員による Zoom 投票の結果、3 名 (Yasuhide Nakamura (仲村 康秀) さん、Yumeng Wan (万育萌) さん、Khaoula Ettahi さん) に対して BPA が授与されました。

Kobe2020 は、韓国原生生物学会会長の Young Ok Kim 博士による Closing Remarks によって締めくくられました。その時私は、最後の閉会の挨拶のための韓国語のスピーチを暗記するために必死でいましたが、Kim 会長は今回の大会に参加された 10 か国以上の国々からの参加者や講演者と、大会の運営に携わってきた多くのスタッフに対する謝意を述べられていました。Kim 会長は、今回の大会のロゴマークとして準備委員会で作成したゾウリムシが接合している様子をモチーフとしたデザイン (図 3) に特に感銘を受けたそうです。ゾウリムシは接合することで新たな世代を作り出していきます。今回の合同大会も、日韓の原生生物学会の活性化に必ず繋がっていくでしょうとの Kim 会長の言葉は、参加者全員の胸に響いた一言だったのではないのでしょうか。

初めての日韓合同大会は、英語を公用語として実施されました。大会を終えて、日本の若者もその気になったら十分立派に堂々と英語で発表し、議論のできる時代になってきたなあという印象を強く持ちました。日本原生生物学会も、いよいよ国際化に向けて新しいステップを踏み出しました。また 3 年後には次の日韓合同大会が、今度は韓国で開催される予定です。次回の合同大会には、もっと多くの、そしてもっと力強い若者たちの姿が見えるのではないかと、今からとても楽しみに感じています。

最後になりましたが、今回の大会を準備するにあたって様々な形で協力していただいた準備委員会の皆様に心からの感謝を込めて、以下にお名前を列挙させていただきます。どうもありがとうございます

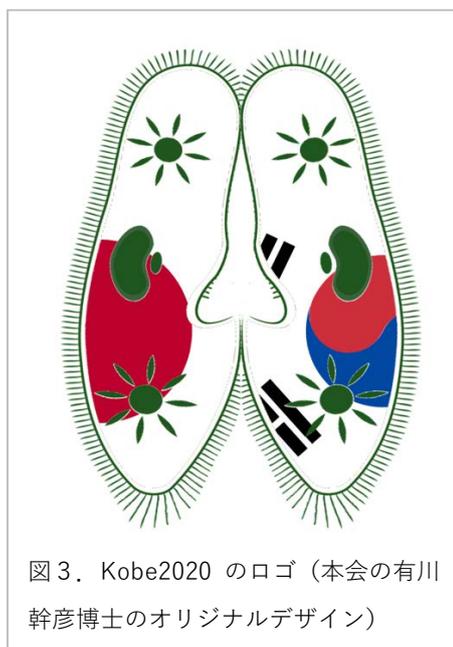


図 3. Kobe2020 のロゴ (本会の有川幹彦博士のオリジナルデザイン)

た。

Organizing Committee (JSP team):

Toshinobu Suzaki (Kobe University), Terue Harumoto (Nara Women's University), Ryo Hoshina (Nagahama Institute of Bio-Science and Technology), Mayumi Sugiura (Nara Women's University), Mikihiko Arikawa (Kochi University), Madoka Kitakawa (Kobe University), Chisato Yoshimura (Kobe University), Kisaburo Nagamune (National Institute of Infectious Diseases), Masashi M. Hayakawa (Kobe University), Euki Yazaki (RIKEN).

Organizing Committee (KSOP team):

Hwan Su Yoon (Sungkyunkwan University), Jong Soo Park (Kyungpook National University), JunMo Lee (Kyungpook National University).